

野中 猛(著)：『心の病 回復への道』

●岩波新書、2012年、760円＋税

本書では、膨大な精神医学の知見や、急速に発展した脳神経に関する情報と、世界と日本の精神保健システムや精神障害をもつ人々の活動の、ほんの一部をお知らせすることになります。でも焦点は、精神保健がどれほど大切な事柄であり、これから生き抜く誰にとっても欠くことのできない情報であるかをお伝えするところに、しっかり置いています。

精神疾患や精神障害は誰にとっても大切な事柄であるはずなのに、目に見えず数字であらわしにくいためなのか、理解されないばかりか、誤解されてもいます。本書では、どこまでが科学でわかっていることで、どこからが現代の課題として残っているのかについて、なるべく私の体験をとおり、昔の歴史から最新の動向まで、明確にお伝えしたいと思います。

第1章では、複数の事例を提示して、大まかに精神保健の全体像をながめます。主に世界保健機構(WHO)のデータから、精神疾患が人類にもたらす重大な問題であることを確認します。また、「疾患」と「障害」のもつ意味について明らかにすることも、心の病を考える際には避けて通れません。普通の身体の病気とは、どこが同じで、どこが違うのでしょうか？

第2章では、座敷牢や「相馬事件」の話から、現代の精神医療に至るまでの歩みをとらえます。精神病患者監護法が定められた明治時代、私が医学部に入った1969年当時、精神病院で研修をはじめた経済成長期のころ、それぞれの時代をふりかえると、精神医学や精神保健はずいぶん変貌してきました。1987年の精神保健法改正前、地域ケアの展開が困難だった時代にあつて、それでも工夫してきた挑戦者たちにもふれましょう。

第3章では、精神疾患にかかった際の症状について整理し、どのように対処すべきか、相談する窓口はどこかについて、実用的な情報を紹介します。そもそも精神疾患がどうして起こるのか、現代の治療法にはどんなものがあるのか、具体的な事例をとおりて考えます。精神疾患が意外に治りやすいことや、相談の窓口が身近にあることを、知っていただきたいものです。

第4章では、精神疾患の後遺症である障害を残す場合に、急性期症状が治まったのち、どのようにリハビリテーションしていくのかについて、これも具体的な事例をとおりてご紹介します。日本では1990年代以降に急速に展開している領域です。「生活のしづらさ」を克服して、「働くことと愛すること」という人生の目標をどのように支援しているのでしょうか？

第5章では、一転して世界的な視野から、精神疾患のあり様や精神保健制度を見渡します。ほとんど私自身で確認してきた事柄です。統合失調症は、先進諸国よりも発展途上国のほうで治りが良い事実は、何を意味しているのでしょうか？ 治療や支援の技術が高度に発達した北米、一方、制度や仕組みに優れているヨーロッパ、それぞれの様子を具体的に紹介します。

第6章では、たどり着いた最新の状況をご紹介します。病気や障害にこだわるよりも、生活や人生に注目する生き方であるリカバリー運動が全世界ではじまっています。もっとも大きく変化している点は、パワーと決定権を共有しようという専門職と利用者との関係性なのかもしれません。

(本書「はじめに」より抜粋)

